The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言

小西　真理子

『臨床哲学ニューズレター』vol.3 は、現役院生・近年の修了生によるエッセイや、昨年度と今年度に開催されたイベントと連携する書き物によって構成されています。また、研究室主催のイベント（臨床哲学フォーラム）や、昨年度からはじめた水曜 5 限のアセンブリアワー（学生や教員による関心を共有する時間）についても記録しています。

特集 1「臨床哲学の今――在学院生・修了生によるエッセイ」では、在学院生や修了生からエッセイを寄せていただきました。これまで自身が歩んできた道のり、臨床哲学に対する想い、そして、臨床哲学という場所に身をおいたことによって書かれた書きものが、各々の仕方で綴られています。臨床哲学は長年、その場所が目指しているものや大切にしているものと、従来求められてきた執筆のあり方とのあいだに生じるコンフリクトに悩まざる得ない状態にあります。そのような制約から明示的に解放された執筆の場所をもうけたうえで、近年修了された方々もふくめ、学生のみなさんにエッセイを書いていただき、ひとつの披露の場所や、節目の場所にしていただきたいという気持ちを込めた特集です。

特集 2「2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー＆ワークショップ」は、2019 年 7 月 30 日～8 月 1 日までの 3 日間、韓国の国立慶北大学哲学科から教員・学生 14 名が来日し、共催した臨床哲学・哲学プラクティスに関するセミナー＆ワークショップの一部の紹介です。1 日目から 2 日目の午前にかけて行ったソクラティク・ダイアローグ（SD）の模様、その後、大阪大学臨床哲学研究室教員のほんまなほさんと私が行った発表の原稿、慶北大学の学生・教員のみなさまのご発表のうち、日本語訳された裵泰珠さんの発表原稿 1 本を掲載しています。また、当日のディスカッションについて簡単な紹介をしています。

特集 3 は、2019 年 3 月 19 日に開催した、ベルギー・スイスで哲学対話を実践している哲学プラクティショナーのドゥニ・ピエレさんとナタリー・フリーデンさんを招いて行った講演・ワークショップの報告です。1990 年頃からはじまった「哲学プラクティス」と呼ばれる社会活動の一翼として、臨床哲学研究室は 2000 年頃から日本で試みを重ねてきました。本イベントと本特集は、その活動に長年携わってこられた臨床哲学研究室院生の桂ノ口結衣さんが実現してくださったものです。また、修了生の小泉朝未さんもイベント当日の様子をまとめてくださっています。そのほか、当日参加された方々の感想も紹介させてもらっていますのでどうぞご覧ください。

特集 4・5 は、2020 年度からはじめた本誌との連携企画である、臨床哲学フォーラムの模様をお伝えするものです。コロナ禍で行われたイベントでしたので、どちらも会場参加に加えオンラインを併用したイベントとなりました。特集 4 は、2020 年 7 月 1 日に開催した第 1 回臨床哲学フォーラム「非人間・暴力・対話――関係性をめぐって」についてです。この

フォーラムには、日本学術振興会特別研究員 PD の小松原織香さんにお越しいただき、講演を行っていただいたほか、臨床哲学研究室の院生さんの自身の研究に絡めた質問に対し、丁寧な応答をいただきました。小松原さんは近年、現場におもむきながら水俣病の研究をされています。「現場に出る哲学者」に対する見解は、一見「ひとを対象としていない」研究をしていると思いこみがちな（あるいはその意識を忘れてしまいがちな）哲学のあり方とは異なる語りかたがなされているので必読です。そのほか、院生さんたちの質問内容も含め、フォーラムの雰囲気の一部をご覧いただけますと幸いです。

特集 5 は、2020 年 11 月 14 日に開催した第 2 回臨床哲学フォーラム「BDSM をとりまく生の営み : ケアとは何か？」についてです。このフォーラムは、この分野における日本の第一人者ともいえる福岡女子大学の河原梓水さんと、フリーランス女王様の観菜月らみぃさんに SM について考察する場を提供していただくことを前提に企画されたものです。さらに、私が大学で BDSM の講義を行った際にコメントを下さったほんまなほさんにもご登壇いただき、加えて私も概説的な発表を行いました。また、このフォーラムの特集にかんしては、フォーラム当日に話されたことと、執筆物として投稿されることとのあいだに、多少の差が生じております。その理由について、詳しくは「特集にあたって」をご覧下さい。

*

2019 年 3 月に刊行された第 20 号をもって雑誌『臨床哲学』が休刊となり、臨床哲学研究室が継続的に行っていた「臨床哲学研究会」は現在休止状態にあります。それと関係して疑問を抱く方がおられるのではないかと思うために明記しておきたいことは、『臨床哲学ニューズレター』vol.3 の刊行は、『臨床哲学』や『臨床哲学のメチエ』に取って代わるという位置づけにはないということです。また、「臨床哲学フォーラム」も「臨床哲学研究会」を改名したものではありません。（哲学・倫理学）研究も、その枠におさまらないものも、それに抵抗するものも、語っても発表しても違和感がない場所が、研究室から再形成されるよう努めていきたいと思います。

『抵抗への参加』（2011）に記されたキャロル・ギリガンの第 1 章のタイトルと、その書籍に記された思想になぞらえて、以下のような言葉を本号に添えたいと思います。これまでになかった新しいものを生むことに想いをはせながら、同時に、これまで築かれてきたものやすでにそこにあるけれど見えなかったり沈黙していたりするものが微かにさまざまな場所や個人の内部で息づいていることを実感しつつ、それらの行く末を想います。